

東京大空襲

宮内 良江

●下高井戸五丁目

戦後も四六年、記憶もだんだんうすれがちですが、あの東京大空襲のことは忘れようとしても、そう簡単に忘れられるものではありません。

昭和二〇年、当時、私は現在の新宿区東大久保に住んでいました。三月一〇日、本所、深川のあの東京大空襲の日、東京の夜空は真赤に染め上り、恐怖心が一ぱいで、歯の根も合わぬ程「ガタ、ガタ」と震えていたものです。

その時、私たちの所は助かりましたが、江戸川に住む親類の家が焼かれ、その後、数日して父と被災見舞いに出掛けた時、電車の窓から外を眺めていたら隅田川が見え、目に映ったのが黒焦げの焼死体だったのです。何体も、何十体も、と言うよりは、あの広い河が黒山のように、水の流れが見えない位浮んでいた恐ろしい光景を、今でもハッキリ覚えています。周囲が火の海となり、熱さで逃げ場を失い、河に飛び込み焼死した人々だと、あとで聞きました。

三月一〇日の東京大空襲以降、ひんぱんに敵機が進入し、昼、夜、関係なく「空襲」「空襲」と不気味なサイレンを鳴ら

し、大火はどんどん広がって行くばかりで、それから、わずか後の五月二五日の夜、今度は私たちの住む新宿が空襲にありました。

夜、就寝しようとしたころ警戒警報のサイレンが鳴りひびき、鳴り終わると同時位にすでにB 29は上空に来ており、焼夷弾の雨を降らせ、すでにあちこちから火の手が上っていたのです。

父から「すぐ逃げる仕度をするんだ」といわれ、母は産後三週間の身で生まれたばかりの弟を背おい、私は三歳の妹を背に、六年生の弟の手をはぐれないようしっかり握り、兄弟等とともに必死で逃げたが、逃げる足元に焼夷弾が追いかけるよう、前に、「ヒュー」「パッシ」「パッシ」とつきささり、猛炎の中を少しでも安全な所へと走ったが、怖くて、怖くて、生きた心地がしませんでした。水で濡らした防空頭巾も熱さですっかり乾き、家族全員「スス」で真っ黒な顔をし、やっと火の粉もとんで来ない所へ無事避難したのです。

翌日、下火になったところ焼跡に戻って見ると、木一本残す

ことなく一面焼野原になり、はるか彼方迄見える程広々となっていた。ただ、近くの銭湯の「エントツ」だけが廃墟の中に「ポツン」と建っているのみであり、この時も大勢の人が焼死し、特に近所の床屋さんの親子も亡くなったと聞いた時は、かわいそうで涙が出て止まりませんでした。ということは、幼児は妹と同じ三歳の女の子で、一旦、お父さんが連れて逃げたが、安全だと思った場所に子供を置き、親は家に荷物を取りに戻りそのまま焼死して、一人残された幼児は火の手がせまって来ても逃げる事が出来ず、黒焦げになり焼死したのです。

その当時、あの猛炎の中では、他人の子供が泣き叫ぼうが、誰でも自分の身を守るのがせい一ぱいで、助ける余裕などなかったのでしょう。八月二五日、終戦になり、玉音放送があったり、まもなく近くの陸軍幼年学校の軍人が、スピーカーを持って私たちの住居「バラック」へ向かって、「みんな、だまされるな、戦争は負けていない、まだ終わっていないのだ」と、気でも狂ったように何度も何度も大声で叫んでいるのが、とても印象的であった。

また、戦後は食料難だし、すべての物が配給制で、農家へ買出しに行っても、いばってなかなか売ってくれず、少しばかりの配給になった塩とか砂糖を持って行くと、やっと売ってくれたのです。

私は思います。戦争とは何のため、一体誰のためだったのか。多くの計り知れない人々の苦しみと犠牲者を出した戦争

の悲劇の傷跡は余りにも深く、二度と戦争体験はしたくありません。
平和をいつまでも大切にしなければと、心から願っています。



杉並区戦争戦災体験記

● 桃井一丁目

村岡 裕

(大正五年生まれ)

悲惨な戦争が終わり四〇年が過ぎました。私たち戦中戦後を生き抜いた者たちが、あの時の悲しい経験を次の時代の人たちに伝えることは、大切なことと思ひ筆をとりました。

三月一〇日の空襲には米機は絨緞爆撃じゅうたんと称して最初の機が当日の目標の四隅に照明弾を投下、一機ずつ高々度より一列で進入、焼夷弾を投下しました。各機は一機ずつ平行に少しずれて焼夷弾を落としてゆきました。とても防ぐ術もない。夜の火事は近くに見えるといいますが、杉並からは新宿あたりが燃えているように見えました。私は日大二高通りからお伊勢の森を通り、早稲田通りを東進、更に現中野区役所裏より寺の多い中野五丁目まで行きましたが、まだまだ火の手は遠く現在の地下鉄落合駅近くであきらめてて学校に行きました。私は当時中野中学の教諭でしたから、……

四月二四、五日の空襲ではこの道は混雑を極めました。なぜならば、三月一〇日の空襲で火を消すために努力した警防団員、警察官、消防団員が多数殉職されたからです。その噂はその後片付けに行った兵士達の口から一般に流され、火を

消すより逃げるが先と、人々が信じたからです。三月一〇日の風速は一〇メートルの強風だったそうですし、同時多発の火災では防火用水は全然役に立たず、消防団のポンプの放水も火元まで届かなかった上、防空壕は火災には役に立たない等が原因だったようです。あのような大火では、火は川幅一〇〇メートルの隅田川を渡ったと申します。そのような状況でしたから、人々は皆荷物を背負ったり、荷車やリヤカーに乗せたりして逃げる人ばかりで、とても自転車で行く状況ではありません。大正一二年の関東大震災の教訓は忘れられたようでした。

四月二四日の空襲では、上落合二丁目の近くで逃げ惑う一〇〇人余りの人を誘導して、中野中学の校庭に避難させることが出来ました。大声で自信を持って指揮をすることと指導者の服装等の必要性を感じました。また、落合火葬場の近くで消火作業につとめた時に、井戸があるのが非常に役に立つことを実感しましたし、トタン板が防火、延焼を防ぐことを知りました。東中野では火事場で持出した荷物を持主に返す

時に仏壇や位牌が手掛りになること、火事の延焼は軒下からということを知り、以後の消火活動に非常に役に立ちました。

五月二五日の空襲では大和町通りが不通になり、憲兵学校附近は火が南から北に渡り通れず、高円寺迄戻り、高円寺駅より実家の安否を知ろうと青梅街道に出ようとして駄目、更に阿佐谷北一丁目より阿佐ヶ谷駅方面に出ようと思いましたが、近くに親戚の家があるのを思い出し、そこに自転車を置き消火活動を始めました。同一丁目では隣が燃えている家に入り、隣家との境がトタン塀であるのを見て、娘さんが一人で消火しているのを助けました。その家の軒先に火がついたのを風呂場の水で消し、更に一軒の家では布団を出してやり、その上に位牌を載せ、また別の家では池の泥水をかけ、更に大きな病院では隣家の屋根にのって夜が明けるまで防火にとめました。大きなモルタル作りで、今思えば河北病院だったと思います。朝になり前述の家で婆婆さんに布団を渡し拜まりました。深川で焼け出されて来たそうでした。

親戚で炊出しを食べてから学校に行きましたら、当時の校長が刀を杖に立っていました。四月二四日に自宅を焼かれ、学校の近くに疎開しておりましたが、自分の荷物も持たさず学籍簿三、四冊だけでした。広島高師出身の方で立派な教育者でした。前の火災で学校の廻りの民家が焼け、一方は国鉄の電車道でしたので中学の防空消火隊は自宅待機させたのですが……。二年の生徒が防空壕で酸欠死したと聞きました。火傷もなく祖父と抱き合って死んでいたとの話で、今でも忘

れることが出来ません。この無差別爆弾の怨みは、一昨年沖縄ひめゆりの塔でアメリカ人の女の子が参拝しているのを見てやっと戦争が悪いのだと自覚しましたが、それまでうらみは消えませんでした。戦争は人間を非情にします。国際間の協定など全然役に立ちません。ソ連軍のノモンハンでの野戦病院攻撃やアメリカの病院船撃沈、終戦時のソ連軍の非戦闘員の殺戮など私たちが忘れることが出来ない歴史も後世に語りつがねばなりません。

当時私は二七、八歳、健康でしたし、体格も良かったので、いつ召集されても不思議と思われぬ程でしたが、陸軍少年飛行兵学校の幹部教官として将校、下士官に剣道を教え、その将校、下士官が少年兵に剣道を教えていました。剣道は日本人にとって最も必要な精神面の指針だったので。そのため召集されずに、杉並で全空襲を体験しました。五月二五日の空襲だけで井荻地区で五〇〇発の焼夷弾を発見したそうですが、荻窪地区は水田や畑が多かったので、焼けた家は一一軒だったと聞きました。その後、戦争が激しくなり、八月一日から最後の学校動員令が下り、終戦まで一四日間陸軍航空工廠氷川トンネル工場に二年生八〇余名を連れて動員に応じました。当時一三歳の子供たちでした。そして終戦、将校と下士官に切腹の作法等を教えたことや二重橋前での号泣などが断片的に思い出されます。また、終戦後の焼跡整理の動員で三年生が一人病死したことも悲しい思い出です。